様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２３日現在

機関番号：１３９０３
研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：　２２５２０３５６
研究課題名（和文）ハーンとアルトーを巡る比較文学研究―ハーンの文学的遺産はいかに継承されたか
研究課題名（英文）A comparative study concerning Lafcadio Hearn and Antonin Artaud – how did Artaud adapt Hearn's most famous story "The Story of Mimi-Nashi Hoichi"?
研究代表者
大貫　徹（OHNUKI　TOHRU）
名古屋工業大学・工学研究科・教授
研究者番号：　30203871

研究成果の概要（和文）：本研究では、ハーン作『耳なし芳一』とそれをアルトーが翻案した『哀れな楽師の驚異の冒険』との比較検討を行うことを通じて、アルトーが、その晩年に、ゴッホの中にもうひとりの「芳一」を見出す経緯を明らかにした。原話の『臥遊奇談』からハーンへと引き継がれてきた「亡霊に取り憑かれてしまった琵琶法師芳一の悲劇」という物語は、アルトーにおいて大きく変貌し、アルトーは芳一の盲目性さえ否定する。しかしだからこそ、アルトーは、その晩年、琵琶法師とか音楽家とはまったく無縁な、画家ゴッホの中にもうひとりの芳一を見出し、そのことによって、ハーン文学の精髄である「異界との接触」というテーマを継承することができた。

研究成果の概要（英文）：This comparative study concerning Lafcadio Hearn's most famous story "The Story of Mimi-Nashi Hoichi" (1904) and another Hoichi-story ("The Surprising Adventure of the Poor Musician") adapted about 1922 from Marc Loge's French translation by Antonin Artaud shows, first, how young Artaud adapted Hearn's Hoichi-story and secondly, why Artaud in his later years considered Dutch painter Vincent Van Gogh to be another Hoichi.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：比較文学、ハーン、アルトー、ゴッホ

１．研究開始当初の背景

1994 年に『世界の中のラフカディオ・ハーン』（河出書房新社）と題する編書が刊行された。編者は、世界のハーン研究をリードする比較文学者　平川祐弘である。この書籍の題名が示すとおり、ラフカディオ・ハーン

（1850-1904）は、今日、世界的視野で論じるに値する作家となりつつある。実際、ハーン没後100年余が経過し、その間、ハーン研究は著しく進んだ。その結果、たとえばハーンの紀行作品を通じて、100年前の世界を（日本も含め）生き生きと思い浮かべることもかなり可能となった。またクレオール作家ハーンという形で、ハーンの先見性もかなり評価できるようにもなった。しかし、この間、案外ないがしろにされてきたのは、ハーンの文学的遺産を掘り起こす作業である。ハーンが100年前に着手した試みが、この100年の間にどのように継承されてきたのか、とりわけ20世紀文学を先導してきた西欧の作家たちにどのように継承されてきたのか、こうした観点でのハーン研究は未だ十分ではない。本研究は、こうした観点に立ち、ハーンの文学的遺産の掘り起こし作業の第一歩として、まずはハーンの代表作でもある『耳なし芳一』の自由な翻案を行ったフランス人作家アントナン・アルトー（1896-1948）に着目する。

２．研究の目的

本研究の目的は、ハーン作『耳なし芳一』とそれをアルトーが自由に翻案した『哀れな楽師の驚異の冒険』との比較検討を行うことを通じて、アルトーが、ハーン文学の精髄である「異界との接触」というテーマをどのように継承し、それをアルトーの文学世界の中にどのように組み込み、発展させていったのかを実証的に明らかにすることである。

なお、ハーンとアルトーとの関係に関しては、すでに、優れた比較文学者であり、ハーン研究に関しても独自の視点を展開している西成彦が、雑誌『國文学』（學燈社）2004年10月号【特集：没後百年　ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）】に掲載された論文「盲者と文芸／ハーンからアルトーへ」において簡単ではあるが触れている。しかしここでの西の視点は、その論文題目に示されているように、谷崎潤一郎の『春琴抄』や『盲目物語』と言った盲者に関わる日本文学の系譜の中にハーンの『耳なし芳一』を位置づけることにあり、そのきっかけとしてアルトーが持ち出されているに過ぎない。また日本中世文学の優れた研究者である兵藤裕己も、雑誌『文学』（岩波書店）2009年7・8月号【特集：ラフカディオ・ハーン再読】に掲載された論文「ラフカディオ・ハーンと近代の【自我】」において触れている。これは西の場合とは異なり、本格的に両者の影響関係を扱っている。ただその際、兵藤の視点が自我の複数性・複層性に置かれているため、結局は、多くの幽霊譚の場合と同様、主体の統一性を危うくするものとしての「亡霊との接触」という次元に矮小化されてしまっている。この結果、「異界との接触」というハーン本来のテーマそのものが十分に論じられることなく終わっており、したがって、アルトーへの継承性という問題もきわめて限定されてものになってしまっている。こうした研究動向を踏まえた上で、本研究ではハーン研究の新しい方向を提示することを目的としている。

３．研究の方法

本研究の目的は、アルトーが、ハーン文学の精髄である「異界との接触」というテーマをどのように継承し、それをアルトーの文学世界の中にどのように組み込み、発展させていったのかを実証的に明らかにすることである。そのため、以下の２点の方法を用いる。

（１）ハーン文学において「異界との接触」というテーマをもっともよく表している作品として『耳なし芳一』（『怪談』〈1904年〉所収）を取り上げ、それと（マルク・ロジェによる仏訳を土台に）自由に翻案したアルト

ーの作品『哀れな楽師の驚異の冒険』（1922年前後に執筆と推定）との詳細な比較検討を行う。

（２）上記の比較検討作業を踏まえた上で、アルトーの文学世界を「異界との接触」という観点から再検討し、そしてハーンの文学的遺産がアルトーにおいてどのように継承され、どのように発展させられて行ったかをアルトーの後期作品までも射程に入れて実証的に明らかにする。とりわけ遺作となった『ヴァン・ゴッホ　社会が自殺させた者』（1947年）は、ハーンからの文学的継承という観点から見ると、もっとも重要な作品と思われるので、この作品を詳細に検討する。

４．研究成果

（１）『耳なし芳一』とアルトーの作品『哀れな楽師の驚異の冒険』との詳細な比較検討に関しては、以下の成果が得られた。

① まず、マルク・ロジェ訳の『怪談』がハーン作品のきわめて忠実な翻訳であるのに対して、アルトーの『哀れな楽師の驚異の冒険』は、忠実どころか、かなり異なっている点に注目した。そうしたなかで、もっとも大きな違いは「この世とあの世の媒介者芳一」という設定がかなり薄められていることである。そのため、この世の「和尚」とあの世の「亡霊」とが互いに芳一を奪い合うということから生じる緊張感がなく、あるのは、突然、亡霊が到来し、有無を言わせず連れて行ってしまったために芳一が味わうことになる驚異の感覚ばかりとなり、だから、ハーン版の芳一とは違い、アルトーが描いた芳一は、自分の最大の武器である聴覚を駆使し、自分なりの世界像を主体的に構築することはないことが明らかとなった。芳一はいつも受動的なまま、いわば右往左往するだけであり、そのため、アルトー版では、聴き手側の感動ではなく、演じている芳一の方の感動のみがひたすら強調されることになる。それどころか、アルトーは聴き手の様子を一切描こうとはしない。ハーンがあれほど熱意を込めて描写した「演じる者と聴く者とが相呼応してつくりあげる、相聞にも似た濃密な語りと音楽の空間」がアルトー版にはまったく欠けている。アルトー版「耳なし芳一」においてもっとも強調されていることは、それゆえ、ただひたすら「見えない存在の物音のようなもの」を全身で感じている芳一の姿であり、また同時に、僅かの間とはいえ、死後の世界に行ってしまった芳一の様子そのものであることが明らかになった。

② アルトーがこの作品を通して描きたかったのは、盲目の琵琶法師芳一という存在ではなく、たとえ一瞬とは言え、芳一が感じた向こうの世界の感触であり気配であり、さらには芳一が「見た」死霊たちの存在そのものであると、この研究を通じて、結論づけることができた。その結果、アルトーにとって、芳一が琵琶法師である必然性はもはやなくなり、異界の存在を感じることができる存在であるならば、ある意味、誰でもいいとなった。

かくして原話の『臥遊奇談』からハーンへと引き継がれてきた「亡霊に取り憑かれてしまった琵琶法師芳一の悲劇」という物語は、アルトーにおいて大きく変貌し、芳一の盲目ということさえ、アルトーは否定する。しかしだからこそアルトーはその晩年に、琵琶法師とか音楽家とはまったく無縁な画家ゴッホに関心を向け、ゴッホの中にもうひとりの芳一を見出すことになったのである。このことはこれまで誰も指摘していなかった点であり、今回の研究の大きな成果のひとつと考えることができる。

（２）上記の比較検討作業を踏まえた上で、

アルトーの文学世界を「異界との接触」という観点から再検討し、そしてハーンの文学的遺産がアルトーにおいてどのように継承され、どのように発展させられて行ったかをアルトーの後期作品までも射程に入れて実証的に明らかにすることに関しては以下の成果が得られた。

これに関し、先に触れた兵藤裕己は「聞こえすぎる耳」を共通項として、アルトーにおける「芳一からゴッホへ」の道筋を辿っているが、芳一の物語を執筆してから２０年以上も経っている時点でアルトーがどれほど芳一の物語を思い浮かべているのが正直言って明らかではない。しかし遺作となった『ヴァン・ゴッホ　社会が自殺させた者』の読解を通じて、本研究では、アルトーがゴッホの中にもうひとりの芳一を見出したことを明らかにすることができた。

アルトーは実際「こういうわけで、ヴァン・ゴッホ以後誰ひとりとして、この巨大なシンバルを、この超人間的な、永久に超人間的な鈴をふり動かすことはできなかったようだ。この世の事物はこの鈴の圧縮された秩序にしたがって鳴りひびいている。／もっともそれは、人びとが、この世の事物の海嘯のようなざわめきを理解しうるほど充分に開いた耳をもっている場合の話だ。かくして、燭台の光は鳴りわたる。緑色の藁で作った肘かけ椅子の上の火のついた燭台は（中略）鳴りわたる」と記している。ここでアルトーが繰り返し「鳴りわたる」と言っている「この世の事物の海嘯のようなざわめき」とは何か。アルトーは再び「耳」という言葉を用いながら「なぜ、ヴァン・ゴッホの絵は、このように、私に対して（中略）いわば墓の反対側から見たものといった印象を与えるのだろうか。／なぜなら、それは、彼が描いた痙攣するような風景や花のなかで、生きまた死ぬ、かつて魂と呼ばれたものの歴史の全体ではないだろうか。／かつて、肉体にその耳を与えた魂、その魂をヴァン・ゴッホは、彼の魂の魂に返した」と語っている。このなかで、アルトーははっきりと「生きまた死ぬ、かつて魂と呼ばれたものの歴史の全体」と言っている。アルトーによれば、ゴッホ晩年の絵画に頻出する痙攣するような風景こそ、まさに死者たちのざわめきそのものとなる。だから、アルトーは「ヴァン・ゴッホの絵は（中略）言わば墓の反対側から見たものといった印象を与える」と言うのである。アルトーによれば、それは死霊のいる世界を描いているとなる。アルトーはゴッホが描いた『烏の飛ぶ麦畑』（１８９０年７月、国立フィンセント・ファン・ゴッホ美術館蔵）を前にして、かくして、ゴッホとハーンを結びつけるのである。「あの烏の絵に戻ろう。／誰かすでに眼にしたことがあるだろうか、この絵に見られるように大地が海とひとしくなるような眺めを。／大地は、液体である海のような色彩はもちえない。だがしかし、ヴァン・ゴッホは、その大地を、まさしく液体である海として、言わばひたすら鋤でもふるうようにして、画面に投ずるのだ。／そして、彼は、その画面を、酒糟色で浸す。葡萄酒のにおいのする大地が、麦畑の波のただなかで立騒ぎ、低く垂れ下がり空のいたるところに重なりあった雲に、波頭のように暗いとさかをふり立てている。」

畑である大地があたかも海のようになり、その海は次第に波が立ち、波頭が見えるようになる。そのうち、その「大地＝海」は荒れ始めて「立騒ぎ」、やがて「暗いとさかをふり立てる」ようになるかもしれない。するとどこからともなく「海嘯のようなざわめき」が聞こえはじめ、やがて「かくれた魔物や伝説的な平家の者どもの飛び交うのを」感じるようになる。そのざわめきはハーンが日本海

の浜辺で聞いた海鳴りと重なると、アルトーは言うのである。

「目が覚めた時は夜中で、本物の海が闇の中で囁いているのが聞えた。仏海の潮の流れに乗って精霊たちが帰って行く。その広漠たる嗄れ声が、はるかかなたから、ざわめくように聞えたのであった。」

このように、アルトーは、その晩年、ゴッホとハーンを結びつけていた。このことも、これまで誰に指摘しなかった点であり、今回の研究の大きな成果である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 大貫徹、モンテシーノスの洞穴の底でドン・キホーテは何を見たか―「外部」との遭遇を巡って、比較文學研究（東大比較文學會）、査読有、97 巻、2012 年、1－5

② 大貫徹、「異界」を巡る考察―ハーン、アルトー、ベケット、文学表象研究（文学表象研究会）、査読無、3 巻、2011 年、11－17

〔学会発表〕（計４件）
① 大貫徹、小泉八雲を新しい地平―最近のラフカディオ・ハーン研究をめぐって、富山大学人文学部ハーン研究会、2012 年 12 月 15 日、富山大学

② 大貫徹、「異界」を巡る考察―ハーン、アルトー、ベケット、日本比較文学会第３２回中部大会、2011 年 11 月 26 日、名古屋大学

〔図書〕（計２件）
① 大貫徹、新曜社、「外部」遭遇文学論―ハーン・ロティ・猿、2011 年、231

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
大貫　徹（OHNUKI　TOHRU）
名古屋工業大学・工学研究科・教授
研究者番号： 30203871
(2)研究分担者
なし　（　　）

(3)連携研究者
なし　（　　）